

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第72号

平成22年 1・2・3月



鳳凰文卣(当館) ー平常展「中国古代青銅器」よりー

特別
陳列

おん祭と春日信仰の美術

～1月17日(日)

東新館

お水取り

2月6日(土)～3月14日(日)

東新館

平常
展

仏教美術の名品

本館 ～2月14日(日)

西新館 休館中

中国古代青銅器

本館 ～2月14日(日)

特別陳列

おん祭と春日信仰の美術

平成21年12月8日(火)～平成22年1月17日(日)

東新館

冬の奈良の風物詩・春日若宮おん祭は、保延二年(一一三六)にはじまったとされ、昨年十二月十七日に八七四回目が行われました。



◎舞楽面 地久(奈良 春日大社)



右方平舞装束(奈良 春日大社)

この展覧会は、おん祭の行われる季節に合わせ、主祭神である若宮神やおん祭に関わる品々を集め、展示を通じておん祭の一端を紹介する恒例の企画です。平城遷都1300年の記念の年を迎えた今回は、奈良時代にその原形が華開いた舞楽に焦点を当てて構成しています。また、おん祭を支えた春日信仰にまつわる品々を併せて展示しており、春日信仰の広がりや多様性が見渡せる内容となっています。

今も昔も盛儀を誇る南都の一大祭礼絵巻を、展示室でもじっくりと楽しみ下さい。

特別陳列

お水取り

平成22年2月6日(土)～3月14日(日)
東新館

奈良に春を呼ぶとされる東大寺二月堂の「お水取り」。正しくは修二会^{しうにえ}といい、十一面観音に過ちを懺悔^{さんげ}して除災招福を祈る、悔過^{けいこ}という行法が行われます。これは、東大寺の実忠和尚^{じつちゅう}が天平勝宝四年(七五二)に創始した十一面観音悔過の行法に始まるとされ、以来不退^{ふたい}の行法として長い歴史を刻んできました。

この特別陳列は、修二会が行われる時期にあわせ、関連する彫刻・絵画・書跡・工芸品・考古遺品を展示するものです。実際に利用された法具や法衣は、精進潔斎^{しやうしんけつさい}し行に臨む練行衆^{れんぎゆうしゆう}の姿を浮かび上がらせ、修二会や二月堂を描く絵画は、その歴史と信仰を伝えます。また、大きな危機となった寛文七年(一六六七)の二月堂焼失と、その再建に関わる史料からは、修二会を支える人々の姿と想いが伝わってきます。

この展覧会をとおして「お水取り」への理解をさらに深め、その伝統と魅力を感じ取っていただければ幸いです。



二月堂曼荼羅(奈良 東大寺)



◎銅三鈷鏡(堂司鈴)(奈良 東大寺)



◎二月堂修中練行衆日記 第二十
(奈良 東大寺)



二月堂縁起 下巻(奈良 東大寺)



二月堂再建梁行地割図(奈良 東大寺)

展覧会予告

平城遷都1300年記念

大遣唐使展

平成22年4月3日(土)～6月20日(日)

今年(二〇二〇年)は、平城京に都が遷された和銅三年(七一〇)から、ちょうど千三百年目にあたります。この記念の年に、当館では、この時代の国際交流の象徴とも言える遣唐使にスポットをあて、その全容を紹介する「大遣唐使展」を開催します。

日本から中国の唐へ初めて公式の使節団、すなわち遣唐使が派遣されたのは舒明天皇二年(六三〇)のことです。以来、寛平六年(八九四)の停止決定までの間に、山上憶良、阿倍仲麻呂、吉備真備、鑑真、最澄、空海ら古代史を彩る巨人たちが、そして今日その名をとどめない数千もの人々が海を

●聖観音菩薩立像(奈良 薬師寺)



●観音菩薩立像(アメリカ ペンシルバニア大学博物館)



●金銅錫杖頭(香川 善通寺)



●刺繍釈迦如来説法図(当館)



十二面観音立像(京都 安祥寺)



渡りました。想像を絶する苦難の旅を経て、彼らが大陸からもたらした知識・情報・文物は、日本の文化水準を飛躍的に高めたのです。

展覧会では、国内はもとより中国・アメリカからも第一級の文化財を集め、様々な角度から遣唐使に迫ります。ボストン美術館所蔵「吉備大臣入唐絵巻」が久しぶりに里帰りするほか、唐の神龍二年(七〇六)につくられた「観音菩薩立像」(ペンシルバニア大学博物館所蔵。日本初公開)と、同時代に日本でつくられた「聖観音菩薩立像」(薬師寺〔奈良〕所蔵。国宝)が並んで展示されます。また、これまでその存在をあまり知らなかった、安祥寺(京都)の「十一面観音立像」(奈良時代)が公開されるの見どころです。どうぞご期待ください。(会期中、展示替えがあります)



吉備大臣入唐絵巻(第一巻、部分)(アメリカ ボストン美術館)～遣唐使船で海を渡る吉備真備

平成22年1月～4月の開館予定

	1月	2月	3月	4月
本館	中国古代青銅器(～2/14) 仏教美術の名品〔彫刻〕(～2/14)			中国古代青銅器(4/3～)
東新館	特別陳列 おん祭と春日信仰の美術 (～1/17)	特別陳列 お水取り (2/6～3/14)	3/15～4/2の間は 全館休館となります	平城遷都1300年記念 大遣唐使展 (4/3～)
西新館	耐震補強工事のため休館中			

特集展示

南北朝・室町時代の彫刻

平成21年12月1日(火)～平成22年2月14日(日) 本館第13室

前号でもお知らせした標題の特集展示について、院派仏師、椿井仏師、宿院仏師といった中世後期の仏師工房の視点から、展示品のいくつかを紹介いたします。なお寄贈を受けた毘沙門天像(宝徳三年銘)は前号に掲載しておりますので、あわせてご覧ください。



図1 四天王立像(多聞天)(奈良 霊山寺)
文和5年(1356)

井仏師が住んだ椿井郷は奈良町の三条通りの南、いまの椿井小学校付近です。椿井仏師は興福寺所属の仏師工房とみられますが、これに対して、京都では院派仏師の活躍が目まれ、足利將軍家との強い結びつきによる造像が指摘されています。この時期の院派仏師の作風は、安定感のある量感表現と、一種表現主義的な傾向を示す衣文表現に特徴があります。当館に寄贈された十一面観音坐像は小像とはいえ、構造技法も含めて南北朝時代の院派仏師の特徴が顕著です。



図2 役行者像(奈良 観音寺)
天文4年(1535)

役行者および前鬼後鬼像(図2)は天文四年(一五三五)に行者像が、二年後の同六年に前鬼・後鬼が造られました。多武峯の先達順幸房が造像に関わっているようで、十六世紀代の椿井仏師次郎の作になることも注意されます。仏師は本来、法名を名乗るべきなのですが、本像の場合、次に記す宿院仏師と同じように、

俗名を名乗っています。

宿院仏師は伝統仏所に属さない仏師集団として十六世紀の南都に登場しました。俗名のままで活躍しており、源四郎・源次郎・源三郎の三代にわたる事績が知られています。初代源四郎は、仏像製作の助手を務める木寄番匠として活躍し、二人の僧侶、海住山寺沙弥仙算と東大寺大律師実清のもとで造仏に関わりました。直弟子の源次は自立して宿院町(奈良女子大学の南に仏師屋を開設し、みずから宿院仏師と名乗りました。宿院仏師の仏像には絵仏師は参加せず、ほとんどの像が素地のままで造られています。素木造り特有の清浄な感性は、近世的な平明な感覚を先取りしたようなところがあります。妙楽寺の如来坐像は天文七年(一五三八)作で、宿院仏師の初期の仏像。棟梁源四郎および源次の組合せによつて造られています。頬の肉取りが張り切つているところが本像の特徴であり、源四郎の個性です。奈良市池田町の薬師如来坐像(図3)は天正元年(一五七三)、三代目の源三郎一門によつて造られています。宿院仏師の後期の仏像です。



図3 薬師如来坐像(奈良 池田町)
天正元年(1573)

源三郎は源次の弟子であり、仏師屋を引き継ぎました。丸い顔つきや細い目の形が源三郎の作風の特徴です。

最後に七条天満神社の天神三尊像を紹介いたします。天神の御神体(菅原道真)(図4)を主尊とし、左右に恵比須神と雨宝童子を配した組合せで、このような三尊構成は他に例がないようです。天正二年(一五七四)の造立で、素朴な作風に宿院仏師との共通性が指摘されますが、宿院仏師の名が記されていないので、彼らとは違う作家の存在が浮かび上がります。俗名のままで仏像・神像をつくるという造像法が、中世末期、南都の造仏界に反映しており、本像も作家名はありませんが、その系譜を引くものかと考えられています。



図4 天神像(奈良 七条天満神社)
天正2年(1574)

鈴木喜博(当館学芸部上席研究員)

繋いでゆくもの

— 収蔵品データベースの公開について —

宮崎 幹子（当館学芸部資料室長）

奈良国立博物館では、一〇月一日よりインターネットで「収蔵品データベース」の公開を開始した。当館の収蔵品は現在、一、四〇〇件（四、〇〇〇点）を超えるが、そのうちの約一、八〇〇点について、名称・員数・品質形状・法量・時代といった基本的な情報や、銘文・詞書を書きおこした文字データが確認でき、さらに主要な収蔵品については解説文や様々な方向から撮影された画像データもご覧いただける。今回はこのデータベースについて簡単に紹介したい。

博物館の収蔵品データベースは何もめずらしいものではなく、ようやく外部に発信できたことに正直なところ胸をなで下ろしているが、公開にあたっては利用者にとって少しでも利便性の高いものとなるように、また内部での情報整理の成果を効果的に表現できるように、工夫を盛り込んだ。その一つは作品間の相互リンク「関連する文化財」である。文化財には、親子関係やセットを構成するものが少なくないが、こうした関係を持つ作品について、親子であるいは子

子のリンクを辿って行き来できるようにしている。例えば、辟邪絵（一二世紀、国宝）など複数点で一件を構成するものは、伝来や解説文など全体にかかわる情報と、法量や詞書、あるいは作品が掲載された文献など、一点ずつに固有の情報がある。それらをデータベース内で一件と一点ごとに適宜振り分けており、相互の情報を参照することで一件の作品にかかわる情報を適切に把握できるようにしている。

また「写真データベース」のリンクでは、当館で別に運用しているデータベース内の当該情報へ直接アクセスすることができる。薬師如来坐像（九世紀、国宝）について、収蔵品データベースで確認できる画像データはデジタル化の完了した一六点にすぎないが、館内にはカラー・モノクロを合わせて一二四枚ものフィルムの蓄積があり、リンクを辿ることによって写真資料の所在も確認できるのである。この写真データベースの公開は遙か以前の平成八年に遡り、収蔵品以外は文字データのみ公開であるが、全国の仏教美術を中心に既に一〇万枚を超えるデータの蓄積がある。実際、外部の研究者や出版者の方々にとって、より切実な利用要求があるのは収蔵品ではなく、当館が永年に渡って蓄積してきたこの写真資料なのであり、そのため早くからデータベースの整備と現在に至る蓄積が続けられてきたのである。



その他に「文献」として、これまで作品が掲載された展覧会図録や図版目録、研究論文のリストもあげている。各々の文献を紐解けば、画面で表示されるものとは別の解説に行き着くことができるので、それらを読み比べるのも利用者にとって楽しみとなるかもしれない。館内では図書の目録デー

タベースを整備中だが、それとの連携が実現すれば、文献についても詳細が確認できるようになるだろう。

収蔵品データベースはまだ公開が始まったばかりだが、利用者にとって収蔵品にかかわる情報への手掛りを提供すること、つまり単独で完結するのではなく、既存情報との連携など、関連する情報資源を繋いでゆく方向を目指したいと考えている。

データベースというと、何か客観的なデータを集積したもの、と思われるかもしれない。しかし文化財に関しては「名称」と「時代」という項目を取り上げても、その背後には長い思考の過程や記述の歴史があるのであり、不変のデータとして存在している訳ではないだろう。このデータベースも、ある段階の解釈や記述を切り取った一断面を示しているにすぎない。文化財にかかわる歴史や記憶がさらに重層的に蓄積されることにより、利用者の複眼的な要求に対応できる機能を実現するのはまだ遠い道であろうが、外部連携も含めてこの繋がり在今后も広がってゆくことを願っている。

奈良国立博物館 収蔵品データベース
<<http://www.narahaku.go.jp/collection/>>





火頭形三尊傳仏(当館)



聖観音立像(当館)



○光背(當麻寺)



○阿閼如来坐像(西大寺)



○菩薩立像(金竜寺)

平常展

仏教美術の名品

本館 第1～13室

1月～2月14日(日)

彫刻

第1室

【大和の仏たち】

○木造薬師如来立像(称名寺)、○木造薬師如来立像(元興寺)、○木造伝明星菩薩立像(弘仁寺)、○木造十一面観音立像(松尾寺)、○脱活乾漆・木造梵天立像、○脱活乾漆・木造伝救脱菩薩立像(以上、秋篠寺)、○木造持国天立像、○木造多聞天立像、○木造西大門勅額(以上、東大寺)、○木造法相六祖像(伝行賀・伝神観)(興福寺)、○木心乾漆伝義淵僧正坐像(岡寺)、○木心乾漆阿閼如来坐像(西大寺)、○木造十一面観音立像(勝林寺)、○木造十一面観音立像(地福寺)、○木造菩薩立像(金竜寺)、○銅造誕生釈迦仏立像及灌仏盤(東大寺)、○木造十一面観音立像(薬師寺)、木造天部立像(兵庫県)、○銅板法華説相図(長谷寺)、○木心乾漆文殊菩薩坐像(薬師寺)

第2室

【注目の逸品】

○木造獅子・象(個人)

【興福寺伝来の四天王像】

○木造広目天立像(興福寺) ○木造増長天立像 ○木造多聞天立像(以上、当館)

【観音菩薩】

○木造観音菩薩立像(観心寺)、○木造十一面観音立像(薬師寺)、○木造千手観音立像(妙法院)、○木造十一面観音立像(元興寺)

【迎講の阿弥陀仏】

○木造阿弥陀如来立像(浄土寺)

第3室

【薬師如来と十二神将】

○銅造薬師如来坐像(当館)、○木造十二神将立像(東大寺)

【光背の美】

○木心乾漆光背(聖林寺)、○木造光背(當麻寺)

第4室

【ガンダーラの彫刻】

石造菩薩立像、石造仏伝図浮彫(以上、当館)

【中国石窟寺院の仏像】

石造如来頭部(雲岡)、石造菩薩頭部(犍鼻)、石造菩薩頭部(響堂山)、石造螺髻像頭部(響堂山)(以上、個人)

【中国・朝鮮半島の金銅仏】

銅造誕生釈迦仏立像、銅造押出五尊仏、銅造供養者坐像、銅造観音菩薩立像、銅造菩薩坐像、銅造力士立像、銅造力士立像、銅造力士立像(以上、個人)、銅造二仏並坐像(当館)、銅造如来立像(光明寺)「1月11日まで」、銅造阿弥陀如来坐像(崇久寺)、銅造如来立像(当館)「1月13日から」

第5・6室

【中国の仏像】

○石造十一面観音立像、○石造三尊仏龕(以上、当館)、木造菩薩坐像、石造如来坐像、○木造諸尊仏龕、○石造三尊仏龕、石造仏五尊碑像、石造仏立像、石造仏浄土碑像(以上、個人)

第7室

【檀像】

○木造薬師如来坐像(当館)、○木造弥勒仏坐像(東大寺)、○木造観音菩薩立像(本山寺)、○木造十一面観音立像(当館)

第8室

【金銅仏】

○銅造誕生釈迦仏立像(正眼寺)、銅造観音菩薩立像(当館)、○銅造菩薩立像(法起寺)、銅造菩薩立像(興福院)、○銅造観音菩薩立像(観心寺)、○銅造菩薩半跏像(神野寺)、○銅造菩薩半跏像(東大寺)、○銅造観音菩薩立像(金剛寺)、○銅造観音菩薩立像(法隆寺)、○銅造薬師如来立像(般若寺)

【塑像と傳仏】

○塑像断片(奈良県薬師寺西塔出土)、塑造人物頭部(奈良県本薬師寺出土)(以上、薬師寺)、侍者像(法隆寺塔本塑像)、塑造菩薩頭部(奈良県定林寺出土)(以上、当館)、塑像断片(奈良県川原寺裏山出土)(明日香村)、塑像断片(滋賀県雪野寺出土)(個人)、塑像断片(鳥取県尾崎寺出土)、火頭形三尊傳仏(伝奈良県橘寺出土)、六角形傳仏(三重県天華寺跡出土)、方形独尊傳仏(中国)(以上、当館)、多宝塔傳仏(中国)(個人)、方形三尊傳仏(奈良県川原寺裏山出土)(明日香村)

第9室

【釈迦如来】

木造釈迦如来坐像(法隆寺)、○木造釈迦如来坐像(東大寺)、木造出山釈迦立像、○木造釈迦如来立像(清凉寺式)(以上、当館)、○銅造誕生釈迦仏立像(菩提寺)、銅造誕生釈迦仏立像、銅造誕生釈迦仏立像(以上、当館)

【阿弥陀如来】

木造阿弥陀如来坐像(当館)、木造阿弥陀三尊立像(峰定寺)、木造阿弥陀如来立像(個人)、木造阿弥陀如来坐像(西大寺)、木造阿弥陀如来坐像(宝冠阿弥陀)(安楽寿院)

第10室

【地藏菩薩】

木造地藏菩薩立像(十市町自治会)、○木造地藏菩薩立像(東大寺)、木造地藏菩薩立像(萬福寺)、○木造地藏菩薩立像(長命寺)

第11室

【大日如来】

木造大日如来坐像(元興寺町)、木造大日如来坐像(西城戸町)

【聖徳太子像】

○木造聖徳太子立像(成福寺)、木造南無仏太子立像(法起寺)、木造南無仏太子立像(西大寺)、木造南無仏太子立像(当館)

○木造大將軍神像(○木造大將軍神坐像(大將軍八神社)、木造大將軍神坐像(当館)

第12室

【動物彫刻】

○木造狛犬(手向山八幡宮)、○木造狛犬、○木造獅子、木造獅子(以上、当館)

第13室

【特集展示 南北朝・室町時代の彫刻】

木造文殊菩薩坐像及納入品(東大寺)、木造毘沙門天立像及納入品(薬師寺)、木造吉祥天倚像、木造十一面観音坐像、木造毘沙門天立像(以上、当館)、木造虎関師鍊坐像(千福寺)、木造四天王立像(霊山寺)、木造役行者・前鬼・後鬼像(観音寺)、木造如来坐像(妙楽寺)、木造薬師如来坐像(池田町)、木造天神三尊像(七条天満神社)

※本館第1～13室での展示は、2月14日(日)をもって当分の間お休みいたします。

平常展

中国古代青銅器(坂本コレクション)

本館 第14・15室
1月～2月14日(日)

中国古代の商(殷)から漢の時代に製作された、青銅器の逸品を展示しています。

爵、觚、觶、長頸尊、觚形尊、罍、方彝、卣、甗、鼎、鬲、簋、盃、豆、盤、匜、盥、壺、鐘、鈃、扁壺、蒜頭壺、甗、鍔、

博山炉、鎮子、鏡、鐙など(当館)。

※展示替えのため、本館第14・15室での展示は2月14日(日)をもっていったん終了し、4月3日(土)より再開いたします。

●国宝 ●重要文化財

すべての展示において、出陳作品を変更する場合があります。

【表紙写真解説】

鳳凰文卣

当館蔵 青銅製 高五一・四センチメートル
中国 商末周初 紀元前十一～十世紀

石器時代に続き、人間が初めて手にした金属は青銅であった。青銅器時代、世界各地では、銅、錫、時には鉛を加えた合金を溶かし、鑄型に流し込んで形作る「鑄造」という方法によってさまざまな青銅製品が製作された。その中でも、つとも青銅文化を成熟させ、大量かつ多種多様な青銅製品を生み出したのが古代中国である。

様々な器種の中で、本品のような提梁と呼ばれる提げ手のついた酒壺を卣と呼んでいる。商代前期(二里岡期 紀元前十七～十五世紀)に出現して以来、晩商期・西周期にかけて発達を遂げ、様々な形態を採った。

器身に大きく縦縞の直条文と浮き彫りの鳳凰文を飾り、凹凸の激しい稜脊と呼ばれる鱗飾りで飾

っている。さらに、稜脊の間には木の枝のように水平に伸びる裝飾が加えられ、全体がすきまなく立体裝飾でうめ尽くされている。蓋も同じ趣向で裝飾されており、複雑な形態の鑄型を駆使した高い技術力の賜物ともいえる製品である。器底と蓋の裏には「婦閼作文嬀曰癸尊彝析子孫」という銘文が刻まれている。

本品とよく似た卣が一九三〇年代に陝西省宝鸡市で出土した杞禁と呼ばれる青銅器セット(現メトロポリタン美術館蔵)にも含まれている。本品もともとそうしたセットを構成していた一つとも推定される。祭祀を執り行う権力者の力を誇示するための威信材として非常に重要な青銅器として作られたものであろう。

岩戸晶子(当館学芸部研究員)

● 公開講座 ●

特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」

1月9日(土) 「春日大社の歴史」
花山院弘匡(春日大社宮司)

特別陳列「お水取り」

2月7日(日) 「二月堂修二会について」
上司永照(東大寺持寶院住職)

※各回とも、午後1時30分～3時。当館講堂にて。先着196名(午後1時に開場し、講堂入口にて入場券を配付します)。聴講無料。

● サンデー・トーク ●

- 1月17日(日) 「春日権現験記絵披見台をめぐる」
谷口耕生(当館学芸部保存修理指導室長)
- 1月24日(日) 「特集展示解説 南北朝・室町時代の彫刻」
鈴木喜博(当館学芸部上席研究員)
- 3月14日(日) 「奈良の文化を感じて-遷都1300年に寄せて伝えたいこと-」
当館解説ボランティア3名が日ごろの活動の中から学んだことをお話しします。
(詳細は当館ホームページにて随時お知らせします)

※各回とも、午後2時～3時30分、当館講堂にて。先着196名(午後1時30分より開場)。聴講無料。

◆本館の一時休館について

当館で平常展を開催しております本館は、2月15日(月)～4月2日(金)の間、展示替えのため休館いたします。また、4月3日(土)からは特別展「大遣唐使展」の会場となるため、平常展「仏教美術の名品(彫刻)」は、当分の間お休みいたします。

なお、「大遣唐使展」(4月3日～6月20日)の期間中、平常展「中国古代青銅器」は開催しておりますので、ぜひご観覧ください。

◆西新館の一時休館について

当館の西新館は、耐震補強工事のため、昨年11月中旬より一時休館しております。工事は**本年(平成22年)9月までの予定**です。しばらくの間ご迷惑をおかけしますが、何卒ご理解いただきますようお願いいたします。

◆仏教美術資料研究センターの一時休館について

仏教美術に関する図書や写真資料を収蔵し一般に公開しております当館の「仏教美術資料研究センター」は、耐震補強工事にともない、昨年10月より一時休館しております。工事は**平成23年3月末までの予定**です。その間、ご不便・ご迷惑をおかけしますが、何卒ご理解いただきますようお願い申し上げます。

◆奈良国立博物館賛助会

2010年1月1日現在、一般会員(個人)32名、一般会員(団体)17団体、特別会員2団体、特別支援会員5団体のご入会をいただいております。

新たにご加入いただきました方々をご紹介します。

【一般会員(個人)】宮本 三郎 様(平成21年10月ご入会)
藤嶋 節子 様(平成21年11月ご入会)

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については400円で観覧できます(共催展の場合は別途定めるものとします)。学生証(引率教職員は身分証明書)の提示をお願いいたします。

〈会員大学等〉(2010年1月1日現在)

大阪成蹊大学芸術学部、大阪大学、畿央大学、京都外国語大学・京都外国語短期大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、京都精華大学、京都大学、京都橘大学、京都伝統工芸大学校、京都文教大学・京都文教短期大学、近畿大学文芸学部、実践女子大学文学部・文学研究科、就実大学人文科学部、帝塚山大学・帝塚山高校、天理大学、同志社大学、奈良教育大学、奈良県立大学、奈良佐保短期大学、奈良産業大学・奈良文化女子短期大学・奈良文化高等学校・奈良学園高等学校・奈良学園登美ヶ丘高等学校、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛教大学、龍谷大学(五十音順)

かるらとうぶへん 迦楼羅頭部片



奈良 明日香村教育委員会蔵
製造
高9.2cm 川原寺裏山遺跡出土
白鳳～奈良時代(7・8世紀)

小さな粘土像の破片。猛禽のくちばしを持つ迦楼羅の頭部である。迦楼羅は、釈迦の説法に会座する守護神。阿修羅などと並び八部衆の一つに数えられる。鳥のような顔つきは、インドのビシュヌ神を乗せて飛ぶ、黄金翼の怪鳥ガルダがもとになっている。

本品は、昭和49年、明日香村川原寺跡の北西部で、大量の塑像(粘土

で作った仏像)片と共に発掘されたものである。川原寺は7世紀中頃、齊明天皇の菩提を弔うため息子の天智天皇が建立したと言われ、飛鳥寺や大官大寺、薬師寺と並んで藤原京の四大寺に数えられた。本品は、おそらくその塔の中に安置された塔本塑像の一つで、法隆寺五重塔内に今でも見られるように、小像が集まり釈迦の事蹟を表していたと推測される。同寺は9世紀に火災に見舞われ、堂塔と仏像は灰燼に帰してしまふ。炎に包まれた塑像は陶器のように硬く焼きしまり、破片となっても当時の形相は崩れずに残った。ただし、眼窩に嵌め込まれたガラス玉は、高熱によって溶け落ちてしまひ、あたかも涙を流しているようである。頬を伝わり落ちる「ガラスの涙」は、この像が炎の中でも健気に立ち尽くしていたことを物語っている。

ところで、大きさこそ異なるが同じ塑像として有名なものに、東大寺戒壇院の四天王像や法華堂の執金剛神像がある。その瞳には黒く輝く玉が嵌め込まれ、通説ではこれは黒曜石であるという。縄文時代の石器に馴染んだ考古屋の意見としては、黒曜石は割って使う素材であっても、玉のように磨ける代物ではない。おそらくその瞳も本品と同じ濃褐色のガラス玉なのではないか。断定はできないが、小さな「ガラスの涙」をみるたびに、迦楼羅一人が特別ではなかったと、ちょっと最良目の想像をしてしまふ。

吉澤悟(当館学芸部教育室長)

※平常展「仏教美術の名品」にて、12月29日～2月14日に展示

展示品の みどころ

とうだいじえんぎ 東大寺縁起

奈良 東大寺
絹本着色
(各幅) 縦153.8cm 横83.8cm
鎌倉時代(14世紀)



第一幅は伽藍図のような俯瞰構図で、東大寺大仏開眼供養の盛儀が説話を織り込みながら描かれている。第二幅は、穏やかな自然景のなかに東大寺にまつわる説話が散りばめられている。登場するのは良弁、行基、鑑真、聖武天皇、光明皇后などで、大仏建立に関わる説話を中心に、あわせて22の場面が細やかに描きこまれる。一つの風景のように見える画面にいくつもの説話を盛り込んでいるが、東大寺という一つの場所で重ねられた土地の記憶を集成して表すこの絵画の性格には適っている。

お水取り(二月堂の十一面観音悔過)の創始に関する話は第二幅の中ほど、水辺の下方にある。洲浜に一人の僧が坐して合掌しており、その視線の先には十一面観音が現れている。傍らの短冊形は「実忠奉請補陀落観音菩薩所」そして「生身十一面尊闍伽渡海来」と読める。さらに観音の後方を見ると波間にそそり立つ岩山があり、短冊形には「海岸弧絶山」とある。

東大寺の実忠が十一面観音悔過を始めるにあたり、はるか南方にある補陀落山に住む「生身」の観音を本尊に迎えたいと祈りを捧げた。するとついに闍伽(仏前に供える水)用の器に乗った十一面観音が補陀落山から海を越え、実忠の前に現れたという場面である。十一面観音悔過の本尊は、観音の姿を写した観音「像」ではなく本来の住処を離れてやってきた本物の観音なのであるとする。この説話は語り継がれてゆくが、本図はその明確な絵画化の最古例である。

北澤菜月(当館学芸部研究員)

※特別陳列「お水取り」にて、2月6日～3月14日に展示

開館予定(1月～3月)

■開館時間

午前9時30分～午後5時
(開館時間延長日)
1月23日(土)、2月3日(水)、3月12日(金)
—午後7時まで
2月11日(木・祝)～14日(日)
—午後9時まで
3月1日(月)～11日(木)・13日(土)・14日(日)
—午後6時まで
※いずれも、入館は、閉館の30分前まで

■休館日

月曜日(祝日の場合はその翌日)、
3月15日(月)～4月2日(金)
※3月1日・8日は月曜日ですが開館します。

観覧料金

□平常展・特別陳列

	一般	大学生
個人	500円	250円
団体	400円	200円

*団体は20名以上です。
*高校生以下および18歳未満の方、満70歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方(介護者同数を含む)は無料です。
*2月3日(水)は、すべての方の観覧料金が無料となります。
*毎月22日は「夫婦の日」として、ご夫婦で観覧される方は一般料金の半額で観覧できます。
*子ども(中学生以下)と一緒に観覧される方は団体料金に適用となります。[子どもといっしょ割引]



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩約15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。

 **奈良国立博物館**
Nara National Museum

〒630-8213 奈良市登大路町50(奈良公園内) ハローダイヤル 050-5542-8600 ホームページ(URL) <http://www.narahaku.go.jp/>

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。
※返信用封筒には宛名を明記し、長形3号の場合は90円切手を、角形2号の場合は120円切手を貼付してください。